

お米づくり新聞

～あたりまえのようにする素晴らしさ～

五年生は、総合的な学習で、須田地域に広がる田んぼを教室に置き換えて、日本の農業の基である稲作について学びました。自分の目・手・足を通した体験で、子供たちは多くの感動・発見をしました。

美味しいお米を作りたい

運動会が近づく5月初旬、「ロータス北潟」の間栄一さんに指導を受け、「お米づくり」は始まりました。おいしいお米をつくりたい、という思いを胸に、水の張った田んぼの中に、



裸足を入れた子供たちでした。「苗は深すぎると、あまりのびず、反対に浅すぎるとたおれてしまう、と聞いてやってみると、実際に手で植えてみると、大変で、とても疲れました。田植え機のすごさも感じました。」と、大変さに目がいついてきた子供たちは、お手伝いに来てくださったJ Aの職員の方々からの「仕事がていねいだ。」の言葉に背中を押されながら作業をする内に、

「田んぼに入ってやってみると、(手植えは)一本一本に心が込められる感じがします。お米を作った人たちの心を受け止めて、これからは、一粒一粒を大切に食べたいと思います。」と、美味しさの背景にある作り手の「愛情」に目が向き始めました。

そうだ、田んぼに行こう!

月に一度は、田んぼに足を運ぶ子供たち。稲の成長を確かめたり、田んぼの生き物に親し

2週間以上前の自分の「足跡」が残っていることへの驚き。あの時の感動を思い起こすことで着実に成長し続けている苗への愛情を感じている。



だりしました。この間、社会科の日本の農業の学習と関わらせて、「機械化」「耕地整理」「水管理」「品種改良」をキーワードに、図書室の本やインターネットを使って調べていきました。自分の生の体験を土台に、様々な情報を整理するためです。

腰が痛い! すっしり収穫!

実りの秋、陸上大会が近づく9月中旬。稲刈り用の鎌を手にと田んぼに向かう子供たち。いつもと違う姿勢で続ける作業に思わず、「腰が痛い!」の声が上がりました。



も、20人で協力すると、あつという間に終了しました。

そして、収穫祭

11月のフリー参加に合わせて、収穫祭を計画しました。間さんに感謝の気持ちを伝えたり、保護者の方に、学習劇「美味しいお米ができるまで」を観て頂くためです。現代版豊作踊り「T T」(田んぼの頭文字Tから)と「U S A」(漢字表記で米国から)も披露しました。

美味しさは、土から...

間さんから、日本農業の課題をお聞きして、「自分も農業に関わっていきたい」「ご飯をたくさん食べるようにしたい」という感想をもちました。さらに、仕事に対するイメージを広げたと思います。それは、一つ一つの作業を「あたりまえ」のように身体を動かしてしている「プロ」のすごさに触れ感動したことです。何でもボタン一つで操作できる時代に生きる子供たちにとって、とても貴重な学習になりました。

間さんの「田んぼの土は、一手間掛けて、良い土にしている」という言葉は、どのような場面にも生きてくる考え方だと思えました。

(5年担当 成田 伸子)

